

# 吉本隆明『言語にとって美とはなにか』

——二種類の自己表出と指示表出——

東 典 幸

章 表現転移論 5 「武蔵野」・「地獄の花」・「水彩画家」。

こうした発想は、吉本自身が「この著者からはたくさん  
の啓発をうけた」と述べている三浦つとむ『日本語はどう  
いう言語か』<sup>(2)</sup>の、ほとんど書き出しに近い部分からすでに  
提出されているものだ。

写生されたり撮影されたりする相手についての表現と  
思われがちな絵画や写真は、実はそれと同時に作者の位  
置についての表現という性格をもそなえており、さらに  
作者の独自な見かたや感情などの表現さえも行われてい  
るといふ、複雑な構造をもち、しかもそれらが同一の画  
面に統一されているのです。

『佳人之奇遇』の風景描写は時間経過にしたがって手当  
たり次第に夕陽や月光を並べているだけのように見える。  
対して、自然主義の時代になると、風景はある人物から見  
られた風景として描かれるようになる。『言語にとって美  
とはなにか』<sup>(1)</sup>で吉本隆明は、それを「表出主体が空間的な  
構造をもつようになった」と説明している。簡単に言え  
ば、建物の表門に立っている人物には裏門が見えない、と  
いふふうを書くということだ。そう書けば、人物と景物の  
空間的な配置がはつきりする。その人物だけが見る風景が  
立ち上がる。だから、「景物と人物の内的な動きを、ある  
密度で連環させられるようになった」と吉本は言う（第IV

これが、「表現された言葉は指示表出と自己表出の織物だ<sup>(3)</sup>」という『言語にとって美とはなにか』の基本理念と重なることは明らかである。この発想源をさらに突き詰めたのが柄谷行人だった。彼は吉本の「表出」概念を「ライブニッツにさかのぼるものだ」と指摘する（「ライブニッツ症候群<sup>(4)</sup>」）。たしかに、「表出」という用語はライブニッツのものだし、右の視点論な発想はモノド論を想起させる。

おなじ町でも異なった方角から眺めると、まったく別な町に見えるから、ちょうど見晴らしの数だけ町があるようなものであるが、同時に、単一な実体の無限の数を考えると、おなじ数だけのあい異なった宇宙が存在していることになる。しかしそれは、ただ一つしかない宇宙を、各モノドのそれぞれの視点から眺めたさい、そこに生ずるさまざまな眺望にはかならない。

（「モノドロジー」五八<sup>(5)</sup>）

モノドは要するに意識のことだ、と考えておこう。意識には鏡のように各々の位置から世界が映し出されるといいう世界観である。逆にそこから意識の在り方も割り出される。無論、表門を映す鏡には裏門は映らないが、「裏門は

映らない」ということも立派な情報だ。次の「それなりに」とはそういうことである。「実体」はモノドを指す。

どの実体も一つの完結した世界のようなもの、神の鏡あるいは全宇宙の鏡のようなものである。いわば、同一の都市でもそれを見る人の位置が異なるに従ってさまざまに表現されるように、おのおの実体はそれなりに全宇宙を表出する。

（「形而上学叙説」九<sup>(6)</sup>）

柄谷が批判的に、「吉本が表出概念によって主張したのは、第一に文学作品の自立性である<sup>(7)</sup>」と述べたのは右の完結性からである。ただ私は、モノドの発想を借りれば、個人の内面というブラックボックスを経由しない文学研究の可能性が拓かれる、という点に注目したい。周知のごとくモノドには「窓が無い<sup>(8)</sup>」。これはモノドが自閉的な内面に引きこもっていることを言うのではなく、逆に、そうした内面をさぐる必要が無いことを示唆している。個人のデータはすべて鏡の表面に表出されているのである。

さて、ライブニッツと吉本の連想ゲームを続けることが本論の趣旨ではない。具体的に『言語にとって美とはなに

か』の表出理論を読むことで、いま触れた可能性のありようを検証しよう。

## 二

『言語にとって美とはなにか』の第I章から「自己表出」と「指示表出」が出てくる。これらが最も重要な概念であることは誰もが認めるところで、本当はこの語の意味が解らないとこの本は一頁も読むことができない。ところが、すべての解説者を悩ませるのが、「自己表出とは、指示表出とは何だ」なのだ。そのいちいちをあらためてここに並べる必要は無からう。<sup>(9)</sup>

「自己表出」のわかりにくさ、それは、この一語に吉本隆明がふたつの言語哲学を混ぜ合わせてしまったことに由来する。異なる言語観から生まれた二つの文学理論を、両方とも「自己表出」という新語で説明すれば、話が混乱してくるのは当然だろう。『言語にとって美とはなにか』を何度も書き直し、そのたびに自分で解説を加えておきながら、吉本自身はいまだにこの欠陥に気付いていない。

浅田彰が「読解不能でしょ<sup>(10)</sup>」と吐き捨てたのも無理はない。しかし、ふたつのコンセプトに分けて「自己表出」を

考えてみよう。すると急にこの本はわかりやすくなってしまう。発想自体はとてもシンプルな理論なのだ。

一方のコンセプトを「A系の理論」と名づけ、そこでの「自己表出」を「自己表出A」とする。A系の理論は発話者の意識や心情を重視する。自己表出Aは発話者の表現意欲に深く関わる用語である。

エンゲルスを引用しながら、吉本は最初に自己表出をこう定義した。

労働の発達が言語の発生をうながしたことと、うながされて言語を人間が自発的に発することとのあいだには、比喩的にいえば千里の徑庭がある。(略) この人間が何ごとかをいわねばならないまでにいたった現実的な与件と、その与件にうながされて自発的に言語を表出することとのあいだに存在する千里の徑庭を言語の自己表出 (Selbstausdruckung) として想定できる。

(第I章 言語の本質 1 発生の機構)

「まだ言語を持たない原始時代の人間は、いろいろな共同作業を発達させていくうちに、意思を伝え合わねば作業できないという状況を迎えるようになった、それで人間は

言葉を話すようになった」と説明する理論はどこにでもある。言葉が必要な状況さえあれば、その状況から言葉は安産するものだ、と考えている。社会主義系の言語論などもそうで、それを批判するものとして、『日本語はどういう言語か』や『言語にとって美とはなにか』が書かれた面もある。

対して、A系の理論の面白いところは、言葉の無い状況と有る状況に大きな違い（千里の径庭）を見つけたことだ。それが自己表出Aの有無である。「千里の径庭」という距離ではなく、「千里の径庭」を成すもの、巨大な境界線が自己表出Aである。たとえば、助けが必要な状況さえあればそれだけで「助けて」という言葉が自然に生まれるだろうか。助けて欲しい、その気持を伝えたい、という欲求も感じないと言葉は生まれないはずだ。発語したいという欲求や発語したい内容、さらに、そんな欲求や内容のもった発語が自己表出Aで、言葉にはこれが欠かせないものである。この発見によって吉本は、社会主義系の言語論と、それを基礎にした文学理論を超えていった。

自己表出は対概念の指示表出とワンセットで言語の本質を成す。そこでA系の理論の指示表出を「指示表出A」と

しよう。自己表出Aが発語者の主観に関わる概念であるので、指示表出Aは、発語者が客観的な対象を指示する発語にあたる。わかりやすい例で代表させれば、物を指す言語だ。

たとえば、私が人に向かって本を見せ、「ここに本がある」と述べた場合、この発言が説明しているのは、私たちがみんなにとって本という物体が存在する状況である。客観的な状況だ。だから、この説明は指示表出性が高い。より吉本の発想の原型に近い例で言えば、私が本を見て「本。」と発語した場合である。この発語で意味された本は、私の思いと関係なく本として存在する客観的な物としての本だ。「本。」は指示表出Aの含有率がほぼ一〇〇パーセントの発語と言えよう。吉本が、品詞の中でも名詞は最も指示表出性が高い、と考えたのもこのために違いない。

対して、いきなり目の前に隕石が落ちて驚いた人間が「わあ！」と叫んだ場合を考えてほしい。この発語は隕石という物体を言い当てているのでもなく、隕石が落ちた状況を説明しているわけでもなく、発語者の心だけを表出している。これはほぼ自己表出Aだけしかない発語と言えよう。吉本が、最も自己表出性が高い品詞として感動詞を選

んだのもこのために違いない。

『言語にとつて美とはなにか』の初版が一九六五年に出て、それが二度目の文庫化を果たした二〇〇一年の「文庫版まえがき」で、吉本は自己表出と指示表出についてわかりやすく解説してくれた。<sup>(11)</sup>それが右に述べた、「名詞は最も指示表出性が高い」「感動詞は最も自己表出性が高い」というA系の理論である。彼自身が「簡単に言えるようになった」と述べている。なぜわかりやすいかというところ、A系の理論しか解説していないからだ。けれど、この本を読み進めれば、結局、A系以外の理論が現れるのだから、読者が混乱することにならない。

A系と異なるふたつ目のコンセプトを「B系の理論」と名づけ、そこでの「自己表出」と「指示表出」を「自己表出B」「指示表出B」としよう。社会主義的リアリズムを乗り越えることが課題であった吉本にとって、A系の理論の方が重要だから二〇〇一年の解説ではB系の理論は切り捨てられたのではないだろうか。けれど、私はB系の方に豊かな可能性があったと思う。

有節音声が「はじめて言語としてのすべての最小条件をもつことになる」段階を吉本がどう説明したか、引用しよ

う。この段階は要するに人が自己表出を獲得する段階である。別の箇所では「有節音声が自己表出として発せられるようになったとき」とも言っている。この箇所の説明を理解するにあたって重要なのは、発語欲求など自己表出Aに関わる要素を考える必要がまったく無いということだ。つまり、A系の理論とは異なる説明がなされているのだ。

音声はついに眼のまえに対象をみていなくても、意識として自発的に指示表出ができるようになる段階である。たとえば、狩猟人が獲物をみつけたとき発する有節音声、音声体験としてつかさねられ、ついに獲物を眼のまえにみていないときでも、特定の有節音声が自発的に表出され、それにもなつて獲物の概念がおもいかべられる段階である。

(第一章 言語の本質 2 進化の特性)

これがB系の理論である。眼のまえに牛が居て「牛」と言う状態と、眼のまえに居ないときに「牛」と言う状態とを比べる。そして、前者から後者へ向かつて言語は完成される、と考えるのだ。対象を眼のまえに置かずとも対象を意味する語を発語できるのは、吉本によれば後者の発語者

が自己表出を獲得しているからである。

しかし、前者の状態を言語未完成の段階と考えるのは無理だろう。前者でも「牛」という発語は十分に言語として機能しているからだ。前者と後者の違いは言葉の使い方の違いだ、と考えるべきなのだ。すると、B系の理論はA系よりさらに単純になる。前者のような、いまここに有る対象や状況を語る発語が指示表出Bであり、後者のように、対象がいまここに無い場合が自己表出Bである、それだけのことだ。ただし、引用中の「指示表出」を指示表出Bとして読めるようになるには、第二章で「像」の理論を学ぶ必要がある。混乱を避けるためにいまはたんに「表出」と読んでおこう。

たとえば、鶴田真由を街で目撃した私が狂喜のあまりその場で「真由」と叫べば、それは指示表出Bの発語であり、また、一人暮らしの部屋にぽつんと座った私が寂しさのあまり「真由」と呟けば、それは自己表出Bの発語である。自己表出Aで考える限り、この発語はどちらも発語者の自己表出からほとぼしるもので、両者に根本的な違いは無い。

言葉の意味とは使用だ、とヴィトゲンシュタインは言っ

た。B系の理論はそれを思わせる。自己表出Bの「牛」や「真由」と、指示表出Bの「牛」や「真由」は、同じ言葉のようでいて、使用方法が異なるから意味も違うのだ。この言語観を基にした文学理論はまだ確立しているとは言えず、ここにB系の理論の新鮮さを感じる。対して、A系の理論は吉本自身が鈴木胤、時枝誠記、三浦つとむを参考にしているとおり、江戸時代からある着想が基になっており、決して新しくはない。A系とB系の理論を比べてみると、両者は重なる場合も多いだろう。けれど、さきほどの「わあ！」はA系の理論では自己表出だが、B系では指示表出になる。何より、言葉が具体的に使われる場面を考えずに名詞や感動詞を自己表出と指示表出に分類することは、A系の理論では可能でもB系の理論ではまったくお話にならない。

吉本隆明は自己表出Aに文学の基本を置いて『言語にとって美とはなにか』を書いている。個人の感情の発露や内面の表現が文学だと考えたといい。しかし、本当はそうしたものを抜きにしたB系の理論の方に可能性があったのではなからうか。

『言語にとって美とはなにか』の第Ⅱ章は言語の「意味」「価値」「像」を扱う。中でも「像」が重要で、この概念を得ることであろうやく『言語にとって美とはなにか』は言語理論を終えて本題の文学理論に移ることになる。あらかじめ大雑把に言えば、意味は指示表出によって生じ、価値は自己表出によって生じ、像は双方の表出の総合から生じる。

けれど吉本の説明はうまくない。彼は意味と価値をA系の理論で説明した。対して像はB系の理論の概念なのだ。そこをA系の理論で説明しきろうとするので、わけがわからなくなる。像は明らかに自己表出Bと指示表出Bの総合なのに。

そうすると、意味と価値の説明を読まなくても像の理解が出来ることになる。実際そうなのだ。無用の説明を吉本は書いたわけだが、論旨の骨組みだけでも簡単に確認しておこう。

①関が原の合戦で徳川家康は石田三成に勝った。

②関が原の合戦で石田三成は徳川家康に負けた。

①の発言者は家康を主体に語り、②の発言者は三成を主体にしている。でも、合戦の勝敗に関して、両者はまったく同じことを言っている。それが①と②の意味だ。なぜ同じかといえば、二人の発言者は、二人の主観的な事情とは関係なく存在する客観的な事実を述べているからである。指示表出Aは言語の客観的な対象を指す働きだった。したがって、意味を吉本のように考えた場合、意味は指示表出によって生じるものになる。

③鶴田真由は薔薇のように美しい。

④鶴田真由は白鳥のように美しい。

同じ対象を、③の発言者は「薔薇のようだ」と思い、④の発言者は「白鳥のようだ」と思う。二人の感じ方がわかる。こうした主観の現れが言語の価値だ。自己表出Aは発言者の主観に関わる概念だった。したがって、価値は自己表出によって生じる、と吉本は考えた。

ちなみに、価値の発想を吉本はソシュールに借りてい

る。言語の差異性と恣意性に注目したソシユールの発想は現代言語哲学の基本理論のひとつだが、吉本は価値を③と④の差異に見た。そして、それぞれの「薔薇のよう」「白鳥のよう」という表現は、客観的な根拠の無い恣意的な発言者の主観に基づく、と考えた。しかし、ソシユールの恣意性は、主観だろうと何だろうと、言葉が何かに「基づく」という考えを否定するものだ。また、実体的な存在を否定したのが差異性の思想的な画期的なところであり、主観を持つ主体という実体を基礎にした吉本のA系の理論とは根本的に相容れないものがある。ソシユールの差異性と恣意性を誤読していると言うよりない。A系の理論の古さを示す部分として確認しておく。

さて、これだけ説明して、いよいよ吉本は像の説明に移る。本当に彼はわけのわからないことを言っている。核心部を引用しよう。あえてここは最終的な『定本版』から引用する<sup>(12)</sup>。理論の選択を誤っていることに気付かぬ以上、何度手を入れようと、仕方ないという例だ。

ある領域内では表出された言語は、あたかもそれ自体が〈実在〉であるかのように像意識の対象でありうるの

だ。それは、もともと言語にとってべつに得手な領域でないため、指示表出の強弱と自己表出の強弱とが、縫目で霧乗<sup>べきじよう</sup>されるときにだけありうるというっておくべきだとおもう。それは言語がたんになにか対象を対象に指示したことによつても、いわねばならぬ必然で思わずいつてしまったことだけでもうみだせない。じぶんに対象的になつたじぶんの意識が〈観念〉の現実にたいして、なお対象的になつているといつた特質のなかで、言語として表出されるときに、はじめて像的な領域をもつといえる。

(第二章 言語の属性 3 文字・像)

〈実在〉と〈観念〉はそれぞれ客観的存在と主観的存在に対応する用語で、それを強調して使つてゐるあたり、いかにもA系の理論で像を説明しようとしてゐる感じが出ている。けど、もともとそれは出来ない相談だ。そのもどかしさが、なんとも自信の無い、「されるときにだけありうる」といつておくべきだとおもう」という言い方に表れている。それでも、吉本の発想はわかる。言葉に触れて像が浮かんでくる、その不思議な感じを言いたいのだ。「ある領域内では表出された言語は、あたかもそれ自体が〈実在〉で



あるかのように「云々とは、「上手に構成された言語は、その言ってる内容が実在するかのようでありありと意識される」という意味だ。そして、それは指示表出と自己表出の双方の働きで生まれる効果だ、と結論したのである。

ここで、B系の理論を思い出そう。いまここに有る対象や状況を語る発語が指示表出B、いまここに無い場合が自己表出B、だった。「海」という言葉を山小屋で呟く、すると、目の前に海の像がありありと浮かんだとする。普通は「海」と言った程度の単純な表現ではそんなことは不可能だが、ここは単純化して考えよう。とにかく、なんでそんな像が浮かぶかといえば、それは「海」という言葉が自己表出Bと指示表出Bの双方から表出されたからに他ならない。つまり、対象がいまここに無い場合の自己表出Bによるから、海の無いところでも「海」と言えるし、対象がいまここにある場合の指示表出Bも働くから、海が現前するように表現されるのだ。本論の冒頭で述べたが、「表出主体が空間的な構造をもつようになった」ときそれは完成すると考えられよう。

像という用語だと、視覚像しか考えにくくなってしまふ。でも、「海」という言葉で波の音を感じたり、潮の匂

いを感じたりしても、それは「像」という語で吉本の言いたかったことを感じたことになるはずだ。つまり言語によって喚起される知覚像全般が像である。

#### 四

『言語にとって美とはなにか』の第三章は主に詩歌を題材にし、「韻律・選択・転換・喩」と題されている。特に本論では喩の理論の一部「2 詩的表現」に焦点を当てた。すでに述べた像の理論がここに応用されるからだ。ただし、像の理論が、像の理論の可否とは関係無く、吉本の説明によって失敗したのはすでに見たとおりである。文庫本で二冊にもなる書物が、像を説く最初の100ページほどで破綻して、以後立ち直れぬまま残り700ページ書き継がれてゆく様は壯観と言つていい。A系の理論への固執は、この後の吉本の思想全体をも誤らせたのではないか、という仮説さえ私は可能だと思ふ。

この章には学術的な難点もある。ヤコブソン以来、我々は隠喩と換喩を比喩の基本とする。だから、隠喩と直喩は類似性にもとづいた、本質的には同質の比喩だと考える。対して、吉本は隠喩と直喩を区別する比喩観を批判し

ているようで、実際は比喩を類似性にもとづく修辭法とだけしか見ていない。この点で、隣接性にもとづく換喩や提喩の特殊性に気付かなかった明治時代の美辭学と変わりないのだ。

二例を挙げよう。

葬列のように

ゆるやかに

無数の黒い小さな蝙蝠傘が

流れてゆく

(黒田三郎「白い巨大な」)

人の群れを「葬列のように」と形容するのは直喩であり、それを「無数の蝙蝠傘」という特徴で表現するのは換喩である。だが、「黒い小さな蝙蝠傘ののろろした移動が葬列を連想させる像をあたえている」と書く吉本が、蝙蝠傘の換喩を葬列の暗さとの類似性で理解しているのは明白だ。

きみの心のなかには

先月の部屋代や

月末の葉代が溜まっていたので

ちよつとした風圧にも

きみの重心は崩れてしまったのだ

(木原孝一「コンクリートの男」)

吉本には提喩の理解が無いので、「先月の部屋代」や「月末の葉代」が貧しい生活を表す比喩であることを指摘できず、それらが「溜まっていた」という部分にしか言及しない。

また、我々が比喩を学ぶ定跡は、直喩、隱喩、換喩、提喩などその分類を知ることだろう。対して、吉本は二種類を知っているだけで十分だと言う。それが「意味的な喩」と「像的な喩」だ。ところが、彼はほとんど定義をせず、前者を「意味にアクセント」を置いた喩と呼び、後者にいたっては「像的な喩」と呼ぶだけだ。読者は彼が挙げる喩の実例と説明から推し量るより無いが、すでに記述は混乱しておりそれは楽な作業ではない。命名からわかるが、「意味的な喩」はA系の理論が基礎にあり、「像的な喩」はB系の理論から導かれる。異なる理論が混在しているのだ。したがって、像的な喩が同時に意味的な喩でありうるのはもちろんだが、意味的な喩でないからといって、それ

を自動的に像的な喩に分類するのは誤りである。吉本にはこの点が自覚できていない。

だが、ここまで読み解いてきた『言語にとって美とはなにか』の論理構造を踏まえれば、彼の言いたいことが見えなくなる。美辞学の延長で考えることができそうなA系由来の「意味的な喩」よりも、興味深いのはやはりB系に属する「像的な喩」だ。これは要するにすでに述べたように、視覚聴覚等の知覚像と結びついた比喩である。形や音を使った比喩と言ったらもつとわかりやすいが、形や音の印象や雰囲気似ているのは像的な喩ではなく意味的な喩である。

吉本が挙げた一番明瞭な例は次の一行だ。

夜明けの屋根は山高帽子

(北村太郎「ちいさな瞳」)

夜明け頃の薄暗がりに見える屋根は、その形が黒い山高帽子に見えるというのだ。吉本の例から離れて、私が思いついたものを挙げると、アルコール漬けの標本にされた胎児を描いた三好達治「玻璃盤の胎児」の一節がある。

昼もなほ昏々と睡る

やるせない胎児の睡眠は

酒精の銀しろがねの夢に

どんよりと曇る亜刺比亞数字の3だ

胎児の姿勢に「3」という数字の形を見たのである。私は「山高帽子」や「3」に、類似性と隣接性で二分する現代の比喩理論に取り込むのは惜しいものを感じる。それは、「3」の形と似ている隠喩のようでも、「3」という形を取り出した換喩のようにも思える。

こうした比喩観を吉本が他の著作、特に『戦後詩史論』などでどう活かし、また活かせなかったかはまた稿を改めて考えたい。

#### 注

- (1) 引用は『改訂新版言語にとって美とはなにかⅡ』(一九八二、角川書店)を使用した。
- (2) 一九五六、講談社。
- (3) 「文庫版まきがき」(『定本言語にとって美とはなにかⅠⅡ』二〇〇一、角川書店)。
- (4) 『ビューモアとしての唯物論』(一九九三、筑摩書房)所収。

- (5) 清水富雄、竹田篤司訳。
- (6) 清水富雄、飯塚勝久訳。
- (7) 「ライブニッツ症候群」、注(4)参照。
- (8) 「モナドロジー」七。
- (9) とりあえず芹沢俊輔「文庫版解説」を挙げておく。「自己表出とはなにか、指示表出とはなにかがうまくつかめない。人にうまく説明できないし、人からなるほどという説明を示されたこともないのである」(注(3)参照)。
- (10) 『近代日本の批評Ⅱ・昭和篇(下)』(一九九一、福武書店)。
- (11) 注(3)参照。
- (12) 注(3)参照。『改訂新版』では、「ある領域内では表出された言語は、あたかもそれ自体が〈実在〉であるかのようには像意識の対象性でありうるのである。それは本来言語にとつてべつに得手な領域ではないため、指示表出の強さと自己表出の強さとが、交点で冪乗されるときにのみ可能である。それは言語がたんに何物かを対象として指示したことによつても、いわねばならぬ必然で思わずいつてしまったということによつても不可能である。自己に对象的になった自己意識が、〈観念〉的な現実性にたいして、なお对象的になつていくといった特質のなかで言語として表出されるときに、はじめて像的な領域をもつといえる」となっている。これも意味不明だ。

(本学教育福祉学科助教授)